

フリーターに対する大学生の意識と態度

杉山 成・神田信彦

Freeter (=freelance part-time worker)-related Attitude in University Students

Shigeru Sugiyama, Nobuhiko Kanda

問 題

Havigurst (1953) の発達課題や Erikson (1959) によるライフサイクルの概念に依らずとも、現代社会において学業を終えた若者が自分の定職を決めて社会の一員になることを多くの人々が当然のことと考えてきた。まれにそれに従わない者がいてもそれは例外と考えられ、社会的に問題視されることはなかった。ところが、この15年余の間に“フリーター”という言葉で形容される一群の若者の存在が社会的に注目され、その急激な増加が社会問題の一つとなっている。

フリーターとは1987年、就職情報誌『フロム・エー』で使用されはじめた言葉である。名づけ親であり当時同誌の編集長であった道下 (2002) は、増加しつつあった無業者 (学業を終えても進学も就職もしない者) のうち、将来の職業に対し自分の明確な目的や夢を持ち努力をし暫時アルバイトを行っている若者を応援する意味で命名した、と説明している。つまり、当初はフリーターという言葉はかなり限定的に、それも肯定的な意味を持つ概念であったといえる。しかし、今日ではこの言葉は、無業の若者一般を意味するように変化してきている。

このような経緯があり、フリーターという言葉の定義はまだ定まっておらず、幾つかの定義が混在している状態といえる。平成12年度労働白書 (厚生労働省, 2000) においては、“フリーター”を「15～34歳で、(1) 現在就業している者については勤め先の呼称が『アルバイト』又は『パート』である被雇用者で、男性については継続就業年数が1～5年未満の者、女性については未婚で仕事を主にしている者、及び (2) 現在就業をしていない者については、家事も通学もしておらず『アルバイト・パート』の仕事を希望する者」と定義している。また赤堀 (2002) は、フリーターを「15～34歳で、在学中の男性・女性と配偶者のいる女性を含めず、(1) 非『正社員』として (就業年数を問わずに) 働いている者と、(2) 『夢』の内容を問わず失業状態にある者」と定義している。両定義で一致しているのは15歳～34歳という年齢の範囲である。15歳は義務教育を修了した年齢ということで理解できるが、上限の34歳という区分は明確な根拠があるのか定かでない。本研究では研究の性格から年齢を含めた明確な定義を行う必要はないが、フ

リーターとは「学業を終えたにもかかわらず定職を持たない若者のうち、アルバイトやパートを専らとする者あるいは現在は働いていないがパートやアルバイトとして働くことを希望している者」として検討を進める。

それではフリーターの数はどの程度であろうか。先の平成12年度労働白書では1997年におけるフリーターの数を約151万人であると推計し、1982年の約3倍になっていると指摘している。一方、赤堀は、総務省『労働力調査特別調査報告』各年度版と総務省『労働力調査年報』各年度版を基に推計を行い、1997年には308万人、2001年には409万人となっているとしている。定義の違いもあって両推計には相当の差があるが、かなりの数の若者がフリーターとして生活し、さらに増加の傾向にあることは間違いない。

こうしたフリーターという生活スタイルに対する意識に関して、小杉・堀有・上西・中島・耳塚・本田（2001）は、若者2000人（自称フリーター1000人、学生・社会人1000名）を対象に調査を行なっている。それによると、フリーターは経済的に不利であると考える一方で、「若いうちは自分のやりたいことを優先させたい」や「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」と考える者が6割を越え、フリーターへの共感を示し、また、「働き口が減っているので（フリーター選択も）しかたない」「誰でもフリーターになるかもしれない」と考える者が6～7割、「『自分探し』のためにいいことだ」「夢のためにフリーターをしている人はかっこいい」と考える者が5～6割であった。このことはフリーターを容認する意識が現代の若者に広く共有されていることを示唆するとしている。

また、日本労働研究機構の「若者の就業行動研究会」（2000）は、調査時点でフリーターである者80名とフリーター経験のある専門学校生17名、合計97名を対象に聞き取り調査を行い、フリーターを3類型（細分化すると7類型）に分類している。類型化は「フリーターとなった契機」と「フリーターとなった当初の意識」を基準に行われ、“モラトリアム型”“夢追求型”及び“やむを得ず型”の類型を提案している。“モラトリアム型”は明確な将来展望、職業展望を持たず学業を修了（あるいは退学）や離職しフリーターとなったタイプである。“夢追求型”は、芸能人、職人やフリーカメラマンなどフリーランサーを志向してフリーターとなったタイプである。さらに“やむを得ず型”は正規に就職する意思があったが就職できなかった者、何らかのトラブルで就職機会を逸しフリーターとなった者などを含むタイプであるとされる。また、フリーター生活を送る若者の心理的側面について、調査に参加したフリーター青年達は、フリーター生活一般については、世間の厳しい目を指摘すると同時に、彼ら自身かなり否定的な発言をしている。ただし、「やりたいこと」があるかどうかという点についての強いこだわりがみられ、「やりたいこと」があるフリーターは認め、それがないフリーターは認めない、という内的な志向性に基づく二分法的な捉え方をしている点が注目される。こうした傾向は高校3年生の進路意識を調査した下村（2000）においてもみられており、卒業後の予定進路別に進路についての意見を分析した結果においては、フリーターを予定している生徒は、他の進路を予定している生徒に比べて、「自分にあわない仕事はしたくない」「有名になりたい」等、内的・主観的な希望への志向を示す傾向が強かった。

フリーター青年のこのような「やりたいこと」を極端に重視する価値観に対して、これを内的な志向性を生かした主体的・積極的な選択と肯定的に評価する立場もあるが、下村（2002）は、フリーターを予定している高校生が学業成績や欠席日数において不利な条件を持っていることが多いことを指摘し、フリーターの職業意識のある部分は、自分にとって可能な進路選択肢を弁別

できなくなったために内的な志望や希望を過度に強調せざるを得ないことに起因していると推測し、心理的不適応や未来展望の乏しさとの関わりを示唆している。社会全体のマクロな観点からみても、安定した生活基盤を持たず年齢を重ねることは、社会的に生活弱者を増大させるだけでなく、一個人として社会の指導的年代にさしかかった場合でもその自覚や責任ある行動の遂行が困難であることが懸念される。これらを考慮すると、青年がフリーターを選択するまでの過程や心理的メカニズムを明らかにし、教育場面で考慮すべき要因を検討していくことは、青年の生活感情や進路指導を考える上での急務であるといえよう。

これらの諸点を踏まえ、本研究では、青年がフリーター生活を選択する過程を探るための端緒として、一般の大学生がフリーター生活に対してどのように考えているかという「フリーター生活への態度」を対象とした調査を行う。そして、フリーターの置かれている条件、具体的にはその目標の有無や生活の自立という条件によって、そうした態度がどのような影響を受けるのかを検討する。被験者となる大学生は、高校卒業後、進学という選択肢をとってはいるが、卒業に向けて再び進路選択に直面することになる。近年では、大学を卒業してフリーターになる者も多いことから、フリーターという選択肢を考慮に入れていることも推測され、そうした被験者のフリーター生活への親和—拒否的態度に関わる条件を把握することは、フリーター生活選択の過程を探る手がかりとなると考えられる。

調査においては、3種類の条件を組み合わせた8種のフリーター生活の形式のいずれか一つを被験者に提示し、その生活についての態度を測定するという方法を取り、フリーター生活への態度と、生活における条件や被験者のパーソナリティとの関連を検討する。

方 法

調査対象 一般教育の心理学を受講中の大学生403名（男子232名、女子171名）を対象とした。

調査方法 授業時間の一部を使い集団実施した。

ビネットの構成 フリーター生活を記述するビネットの構成は、自由記述による予備調査を参考に行った。フリーター生活への態度に深く関わる要因として、①性別（男性のフリーター—女性のフリーター）、②目標の有無（将来的にかなえたい目標がある—目標がない）、③生活の形態（親と同居し、生活費を依存—親と別居し、生活費も自立）という3要因を選出し、それらをTable 1のように組み合わせて、8種類の短い文章を構成した。たとえば、《男性・目標あり・生活自立》《女性・目標なし・同居》の条件のビネットはそれぞれ次のようになる。

Table 1 実験条件の内容と被験者の人数

目標の有無	目標あり				目標なし			
	同居		自立		同居		自立	
人物の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
実験条件	1	2	3	4	5	6	7	8
人 数	51	51	30	56	52	52	53	51

《男性・目標あり・生活自立》条件：“23歳の男性、Aくんは今春大学を卒業したのですが、現在は定職にはつかず、アルバイトで生活をしています。Aくんは経済学部に所属していましたが、あるきっかけから、全く畑違いの仕事に関心を持つようになり、その方面に進みたいと思うよう

になりました。現在は自宅を出て、1人暮らしをしています。自分のアルバイトで生活費や小遣い、そして進学の学費をためています。将来は専門の大学を卒業して、資格を得て、その仕事に就きたいと考えています。”

《女性・目標なし・同居》条件：“23歳の女性、Aさんは今春大学を卒業したのですが、現在は定職にはつかず、アルバイトで生活をしています。Aさんは経済学部に所属していましたが、将来の目標が定まらず、自分に適していると思える仕事を見つけることができませんでした。現在は自宅に親と一緒に住み、生活費や家事の面で支えてもらいながら、とりあえずアルバイトをして、自分の小遣いを稼いでいます。将来のことは考えておらず、やりたいことが見つかるまでこの生活を続けていきたいと思っています。”

パーソナリティ尺度 SD法の形式によって未来へのイメージを測定する都筑（1994）の時間的態度（未来版）、および、将来の成果獲得についての統制感の個人差を測定するLocus of Control尺度（LOC：鎌原・樋口・清水、1982による日本語版）、自分自身のどの側面に注意を向けやすいかという自意識特性を測定する自意識尺度（SCS：菅原、1984による日本語版）を使用した。

質問紙の構成 ビネットに記述されている生活について、被験者の態度を4つの側面から測定した。まず、その生活をどの程度認めるか（共感－非共感）、フリーターの登場人物（Aさん）が幸福になれると考えるか否か（成功予測－失敗予測）、そうした生活を送ることに對してどの程度賛成か（賛成－反対）、そして、同じような状況になったときに自分はその生活を望むかどうか（希望－拒否）である。これらの側面について、「とても共感する」から「全く共感しない」（共感－非共感の場合）までの5件法によって測定した。

各質問紙には8種類のビネットのうち、ひとつだけが掲載されており、それらはランダムに被験者に配布された。よって、8種類のビネットのうち、被験者は配布されたいずれか一つに対してだけ回答した。他方、上述のパーソナリティ尺度は全員に對し実施され、LOC尺度は4件法、その他の尺度は7件法によった。

結果の整理

被験者の属性について検討したところ、被験者となった大学生の中に常勤の仕事を持っている学生が7名存在していることが判明した。こうした社会人学生は職業観について一般学生とは異なることが推測される。今回の研究目的の一つは一般の学生のフリーターに對する態度の一般傾向を知ることにあるので、この7名は分析から外すこととした。その結果、合計396名（男性227名、女性169名）のデータが以下の分析では用いられた。年齢の平均は19.88（標準偏差1.54）、アルバイトの経験率は89.6%であった。また、各パーソナリティ変数については、それぞれ得点が高いほど外的統制傾向、自意識傾向、未来への肯定的なイメージが高くなるよう得点化し、合計得点を算出し、 α 係数を求めた（Table 2）。いずれの尺度も以後の分析に足る内的整合性を有していると判断された。

フリーターに對する4つの態度については、得点が高いほどその生活に共感し（共感度得点）、幸福になれると予測し（成功予想得点）、そうした生活に賛成の気持ちを持ち（賛成度）、そして、同じような状況になったときに自分はその生活を望む（同調性得点）という方向に得点化をした。この4得点に關し男女別に平均値を求めたところ、共感性、成功予測、賛成度に有意差が確認され、男性に較べ女性がビネットの生活に肯定的な態度を示している傾向がみられた（Table 3）。

Table 2 各尺度の平均値と標準偏差

尺度名	最小値	最大値	平均値	標準偏差	α 係数
外的統制性	22	58	39.34	6.87	0.78
公的自己意識	13	77	54.99	10.33	0.86
私的自己意識	16	70	48.78	10.27	0.85
未来への肯定的態度	18	135	73.26	14.03	0.91

Table 3 被験者の性別によるフリーター態度得点の平均値

態度	性別	人数	平均値	標準偏差	t (393)
共感性	男性	227	3.26	1.26	2.68**
	女性	169	3.78	2.51	
成功予想	男性	227	3.00	0.82	4.52**
	女性	169	3.37	0.80	
賛成度	男性	227	2.73	1.20	2.91**
	女性	169	3.08	1.12	
同調度	男性	227	2.44	1.21	1.42
	女性	169	2.61	1.14	
態度合計	男性	227	11.45	3.36	3.63**
	女性	169	12.86	4.05	

** p<.01

フリーター生活の条件による差異

フリーターに対する態度について、4つの態度得点、およびそれらの合計得点（以後、態度合計得点と呼ぶ）の平均値を実験条件ごとに示したものがTable 4である。

これら5変数を従属変数、フリーター生活を構成する3条件（登場人物の性別、目標の有無、生活形態）と被験者の性別を独立変数とした4要因分散分析を行ったところ、成功予想においては目標の有無と生活形態に1次の交互作用がみられ、さらに被験者の性別および目標の有無と生活形態の主効果が確認された（Table 5）。共感性、賛成度、態度合計においては、目標の有無、

Table 4 実験条件別にみたフリーターに対する態度の平均値

実験条件	人数	共感性		成功予想		賛成度		同調度		態度得点		
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
対象の性別	男性	185	3.33	1.22	3.04	0.87	2.78	1.11	2.46	1.20	11.62	3.60
	女性	211	3.48	1.19	3.26	0.80	2.96	1.24	2.58	1.17	12.28	3.70
目標の有無	有り	187	3.89	1.05	3.57	0.69	3.39	1.14	2.97	1.26	13.82	3.26
	無し	209	2.98	1.18	2.79	0.78	2.41	1.02	2.12	1.00	10.31	3.21
同居・単独の別	同居	208	3.17	1.25	3.11	0.84	2.58	1.15	2.33	1.19	11.19	3.68
	単独	188	3.67	1.10	3.22	0.83	3.21	1.13	2.74	1.18	12.81	3.47
合計		396	3.41	1.21	3.16	0.84	2.88	1.18	2.52	1.18	11.97	3.67

Table 5 実分散分析の結果（有意差のみられたもののみ）

従属変数	共感度			成功期待			賛成度			同調度			態度得点		
	自由度	F 値	有意確率	自由度	F 値	有意確率	自由度	F 値	有意確率	自由度	F 値	有意確率	自由度	F 値	有意
対象の性別															
目標の有無	1	56.19	0.00	1	96.69	0.00	1	49.28	0.00	1	49.28	0.00	1	105.87	0.00
同居・自立の別	1	17.48	0.00	1	3.37	0.07	1	10.87	0.00	1	10.87	0.00	1	26.05	0.00
被験者の性別	1	4.63	0.03	1	16.96	0.00	1	4.95	0.03				1	6.67	0.01
目標×同居・単独				1	5.05	0.03									
LOC				1	8.58	0.00	1	4.74	0.03	1	5.97	0.02	1	8.63	0.00
目標×未来への肯定的態度				1	6.38	0.01	1	5.14	0.02	1	4.11	0.04	1	6.72	0.00

生活形態と被験者の性別の主効果がそれぞれ確認され、同調性については目標の有無と生活の形態の主効果が確認された（Table 5）。

ここで成功期待において確認された交互作用を検討するために、目標の有無の2水準と生活形態の2水準を組み合わせ（目標あり一同居、目標あり一自立、目標なし一同居、および目標なし一自立）、その4条件に対して成功予想を従属変数とする1要因4水準の分散分析を行ったところ、主効果が確認された（df=3, f=39.31, p<.001）。さらにこれについてTamhaneの方法による多重比較を行ったところ（Table 6）、《目標あり一自立》条件と《目標あり一同居》条件との間に有意差がみられ、目標がない場合には生活形態による成功予測に差はないが、目標がある場合には、親元を離れて自立している方が親と同居している場合よりも成功すると期待されることが示された。

なお、共感度、賛成度、および態度合計における目標の有無、生活形態および被験者の性別の主効果については、いずれも、目標あり条件>目標なし条件、自立条件>同居条件、被験者が女子>被験者が男子という方向で肯定的な態度を持たれる傾向があった。また、同調度においても、目標あり群が目標なし群よりも、また、自立条件が同居条件よりも、肯定的な態度を持たれる傾向があることが示された。

Table 6 目標の有無と生活形態の組み合わせによる成功予想の平均得点と多重比較

	度数	平均値	標準偏差
①目標有り・同居	102	3.43	0.74
②目標有り・別居	85	3.73	0.60
③目標無し・同居	106	2.79	0.82
④目標無し・別居	103	2.79	0.75
合計	396	3.16	0.84

※有意差は以下の通り（ $\alpha = .05$ ）：②<①<③④

パーソナリティによる差異

フリーター生活への態度にパーソナリティ変数がどのように関わっているか検討するために、パーソナリティ変数であるLOC得点の高低、自意識得点（私的自意識得点と公的自意識得点）の高低および未来イメージの高低をそれぞれ別々に独立変数として、さらに、それぞれに目標の有無、生活形態および被験者の性別を独立変数として加えて4要因とし、フリーター生活への態度の5変数をそれぞれ従属変数とする4要因分散分析を行った。

各パーソナリティ変数の高低2群の共感度、成功予想、賛成度、同調度および態度合計の平均値はTable 7の通りである。分散分析の結果、公的自己意識の高低と私的自己意識の高低を独立変数として含む分析では、いずれも両変数が有意な効果を持つ交互作用および主効果は得られなかった。次に未来イメージをパーソナリティ変数として含めた分析では、成功予想、賛成度、同調度および態度合計を従属変数とした場合、目標の有無と未来イメージとの1次の交互作用が有意であった（Table 5）。さらに、LOC得点の高低を含む分析では、成功予想、賛成度、同調度および態度合計それぞれにおいて、LOC得点の高低の主効果が有意であった（Table 5）。なお、目標の有無、生活形態および被験者の性別の効果については、先に述べたフリーター生活の条件による態度の差異の分析と概ね同様の結果であった。

Table 7 各パーソナリティ変数の高低によるフリーターに対する態度の平均値

		n	共 感		予 想		賛 否		自 分		態度得点	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
時間的展望	低	196	3.37	1.28	3.19	0.92	2.83	1.29	2.52	1.26	11.90	4.02
	高	200	3.45	1.13	3.13	0.76	2.93	1.07	2.53	1.15	12.05	3.32
LOC	低	219	3.47	1.21	3.23	0.86	2.93	1.21	2.64	1.22	12.28	3.82
	高	177	3.33	1.20	3.07	0.79	2.81	1.16	2.40	1.13	11.61	3.48
公的自己意識	低	197	3.31	1.21	3.18	0.83	2.94	1.17	2.52	1.19	12.03	3.72
	高	199	3.44	1.21	3.14	0.85	2.82	1.20	2.53	1.20	11.93	3.64
私的自己意識	低	200	3.49	1.16	3.16	0.80	2.88	1.15	2.49	1.14	12.03	3.48
	高	196	3.32	1.25	3.16	0.88	2.87	1.22	2.56	1.24	11.91	3.87
合 計		396	3.41	1.21	3.16	0.84	2.88	1.18	2.53	1.19	11.97	3.68

そこで、未来イメージを独立変数として含む分散分析において確認された交互作用について詳しく検討するために、成功予想を従属変数とし、交互作用のある2要因の組み合わせによる4水準を独立変数とした1要因分析を行った。4群の主効果は有意（df=3, f=39.35, p<.001）であり、Tamhaneの方法による多重比較を行った結果《目標あり—未来イメージ低》群は《目標あり—未来イメージ高》群に比し、有意に高い成功予想を行っていた（Table 8）。賛成度についてもまた、上と同様の1要因分散分析を行い、有意な主効果（df=3, f=29.44, p<.001）を得、Tamhaneの方法による多重比較を行った結果《目標なし—未来イメージ高》群は《目標なし—未来イメージ低》群に比し、有意に高い賛成度を示した（Table 9）。さらに、同調度を従属変数とする同様の分析においてもまた、有意な主効果（df=3, f=20.75, p<.001）を得た。多重比較の結果はTable 10の通りであるが、目標ありなしともに未来イメージの高低による有意差はみられない。見方を変え、肯定的未来イメージ高群と低群とで目標の有無で同調度得点を比較すると、未来イメージ高群は

Table 8 成功予想得点の比較成功
(目標の有無×未来への肯定的態度)

	度数	平均値	標準偏差
①目標有り・肯定低	94	3.70	0.70
②目標有り・肯定高	94	3.44	0.66
③目標無し・肯定低	102	2.72	0.84
④目標無し・肯定高	106	2.86	0.74
合計	396	3.16	0.84

※有意差は以下の通り ($\alpha = .05$): ①>②>④③

Table 9 賛成度得点の比較
(目標の有無×未来への肯定的態度)

	度数	平均値	標準偏差
①目標有り・肯定低	94	3.48	1.22
②目標有り・肯定高	94	3.30	1.07
③目標無し・肯定低	102	2.23	1.04
④目標無し・肯定高	106	2.60	0.94
合計	396	2.88	1.18

※有意差は以下の通り ($\alpha = .05$): ①②>④>③

Table 10 同調度得点の比較
(目標の有無×未来への肯定的態度)

	度数	平均値	標準偏差
①目標有り・肯定低	94	3.09	1.24
②目標有り・肯定高	94	2.86	1.19
③目標無し・肯定低	102	2.00	1.04
④目標無し・肯定高	106	2.25	0.96
合計	396	2.53	1.19

※有意差は以下の通り ($\alpha = .05$): ①②>④③

Table 11 態度得点の比較
(目標の有無×未来への肯定的態度)

	度数	平均値	標準偏差
①目標有り・肯定低	94	14.22	3.35
②目標有り・肯定高	94	13.41	3.14
③目標無し・肯定低	102	9.76	3.35
④目標無し・肯定高	106	10.83	3.00
合計	396	11.97	3.68

※有意差は以下の通り ($\alpha = .05$): ①②>④③

低群に比較し、目標の有無での変化が少なくなっており、この傾向が交互作用として現れたと考えられる。また、態度合計についてはTable 11の通りであり、賛成度得点と同様の傾向が示されている。

LOCの主効果についてみると、いずれも外的統制傾向が低い群は高い群に比較し、成功予想、賛成度ともに高く、肯定的にフリーター的生活態度をとらえ、高い同調度も示していた。また、それらの合計得点である態度合計にもそれが反映されている (Table 7)。

アルバイト経験による差異

アルバイト経験の有無とフリーター生活への態度との関連を検討するために、アルバイト経験がある群 (354名) とアルバイト経験のない群 (42名) のフリーター生活への態度について平均値の検定を行った (Table 12)。

すべての従属変数において、アルバイト経験群の方が未経験群に比してフリーター生活に対する肯定的な態度を示しており、賛成度と態度合計得点に関しては両群の間に有意な差が確認された。

考 察

フリーターに対する態度についての全体的傾向として、共感度と成功予測については目標なし条件以外は肯定の方向に平均得点が分布していた。しかし、賛成度 (目標あり条件と独居条件を

Table 12 アルバイト経験有／無群におけるフリーター態度得点の平均値

態度	アルバイト経験	人数	平均値	標準偏差	t (393)
共感性	あり	354	3.54	1.97	1.48
	なし	42	3.07	1.23	
成功予想	あり	354	3.19	0.83	1.92
	なし	42	2.93	0.82	
賛成度	あり	354	2.93	1.20	2.28**
	なし	42	2.49	1.03	
同調度	あり	354	2.56	1.20	1.62
	なし	42	2.24	1.09	
態度合計	あり	354	12.22	3.94	2.33**
	なし	42	10.73	3.29	

* p<.05

除く)と同調度においては否定の方向に平均得点が分布していた。フリーターの心情は理解できるものの、その生活を肯定したり、さらには自分がフリーターを選択するかしないかという立場におかれたとしたら、それにはためらいを持つということはこの結果は示しており、本実験の被験者がフリーターとは別の選択肢を考慮し選択する可能性を示していると考えられる。すなわち、目標は目標として持つがとりあえず何らかの安定した立場を選択したいか、または、何が向いているかあるいはやりたいことが明確でなくともやはり安定した立場を選択したいという方向への志向性が推測される。

ビネットの人物の性別はフリーターへの態度に影響することはなかった。研究にあたって、男性優位が続いている社会状況では、女性は就職に関して高い期待が持たれにくい傾向があり、そのことから、男性がフリーターであるよりも、女性がフリーターであることが許容されると予想した。しかしながら大学生においては、それまで経験してきた学校教育でジェンダーによる差異は排除されてきたことが推測され、それが結果にも反映したものと考えられる。

目標の有無に関しては、目標があってフリーターである者が目標なしでフリーターである者より、共感され賛成されていた。同調度はわずかに否定の方向にあったものの、目標ありの方が目標なしより高い数値を示した。目標無しは明らかに否定的に捉えられていること、言い換えれば受動的にフリーターを選択することは歓迎されないということを示すものである。生活形態、つまり親と同居しているか単独で生活し経済的にも自立しているかという要因についても、目標の有無と同様の結果であった。自立している方が共感され賛成されていた。同調度はいずれも否定の方向にあったが、自立の方が肯定方向に近い数値であった。不安定な生活ではあっても親がかかりでないことは、多少とも安易さが割り引かれ評価されるのであろう。登場人物であるフリーターの成功予測に関しては、目標の有無と生活形態との交互作用がみられ、目標のある場合はない場合よりも成功を高く予測されるが、目標のある場合は自立している場合が親と同居しているばあいよりもさらに成功すると予測されていた。一方、目標のない場合は生活形態における差は見られなかった。経済的に自立しながら目標の実現を図ることは、相当に強い覚悟と意思をその背景に読みとらせるのであろうか。一方、親と同居しながら目標の実現を図るというのは安易で甘いと受け取られているのかもしれない。目標のない場合、差が見られなかった。これらのことか

ら成功予測に関しては目標の有無が生活形態に先行して判断されることを示すものと考えられる。

小杉ら（2001）の調査では、調査対象の若者の60～70%がフリーターに共感し好意的であった。しかし、今回の調査は単にフリーターとせず、3つの要因を介在させた。その結果、本研究のサンプルである大学生は、フリーターを単一のものとして認識しているのではなく、その生活の条件によって評価も変化させることが明らかになった。

他方、パーソナリティ変数のうちフリーターへの態度に影響を与えたのは、LOCだけであった。LOC低群は高群よりも成功予測、賛成度、同調度それぞれ肯定的であった。つまり自分の行動が期待する結果をもたらすと期待する内的統制期待の高い群は低い群よりもフリーターを肯定的に評価していた。たとえ受動的であっても集団に明確には所属せずフリーターとして独力で働くことが評価されるのであろうか。またLOCは自分の行動と結果の間の関係に対する期待を扱う概念であるが、この期待が他者の行動の評価にも反映することを示すものである。

成功予想、賛成度、同調度および態度合計に関して、被験者の未来イメージはビネットの目標の有無と交互作用を持っていた。数値の出方に注目すると、成功予想、賛成度ともに、目標ありの場合と目標なしの場合の評価に関し、未来イメージ低群は高群に比べ傾きが大きく、目標ありについてはより肯定的に、目標なしについてはより否定的に捉えていた。なお、同調度と態度合計についてもその傾向は見られたが、多重比較の結果はそれを保証するものではなかった。未来イメージの低群の方が高い成功予測をしている点は予測とは異なる結果であったが、この結果を考えるにあたっては、この実験のデザインが対人認知の枠組みをとり、それに対して未来のイメージは個人内要因であることに留意する必要があるように思われる。この点を考慮すると、未来イメージの低い（つまり自身の未来が暗いと考え）個人は、自身を基準とした対比効果によって、目標を持っている登場人物の成功可能性をより高くとらえているという可能性が考えられよう。この未来のイメージについて、VanCalster, Len & Nuttin（1987）は、これを未来に起こるであろうさまざまな出来事の価値を反映したものと考え、動機づけ要因として検討しているが、他者の認知等、対人的分野での研究はほとんど成されておらず、その点で興味深い結果といえる。

アルバイト経験の有無との関連については、フリーター生活への態度すべてにおいて、アルバイト経験群の方が未経験群に比べフリーター生活に対する肯定的な態度を示していたが、これについては2つの可能性が考えられる。一つは「大学生がアルバイトをすること」についてどう考えるか、という一般的な態度が、フリーター生活への態度およびアルバイト経験（アルバイトをするか否か）という両変数に影響を与え、よってこの2変数間に擬似的な相関がみられているという可能性、もう一つは、アルバイトに携わった経験がフリーター生活への態度に直接影響を与え、その結果、態度がより肯定的な方向へシフトしたという可能性である。特に後者の見解は、フリーターへの態度の形成過程を考える上で大変興味深いだが、今回の実験からそれを結論づけることはできない。今後、新入生の（アルバイトやサークル活動を含めた）大学生活への適応過程を時系列的に調査していくことで、より精密に検討する必要がある。

最後に、今回の研究においては、フリーターに至った理由に関して目標の有無に限って検討を行ったが、昨今の雇用情勢は若者に依然として厳しいものがあり、就職したくてもできない状況下でやむを得ず暫時フリーターになる者も相当数あると考えられる。就業行動研究会（2000）による類型化によっても“やむを得ず型”が多く存在し、小杉らの調査はフリーターのうち40%程度がそれにあたるとしている。この後、こうした点も勘案してフリーターを取り巻く心理的環境を明らかにしていくことが求められる。

引用文献

- 赤堀正成 2002 フリーター——新自由主義改革の落とし子—— 労働の科学, 57, 2, 4-9.
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle. psychological Issues I. 1., Monograph International University Press, Inc, New York. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Havighurst, R. J. 1953 Human Development and Education. New York: Longmans, Green & Co., INC. (庄司雅子訳 1958 人間の発達課題と教育——幼年期から老年期まで——)
- 廣瀬英子 1998 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46, 343-355.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 1982, 30, 302-307
- 厚生労働省 2000 平成12年労働白書
- 小杉礼子・堀有喜衣・上西充子・中島史明・耳塚寛明・本田由紀 2001 大都市の若者の就業行動と意識——広がるフリーター経験と共感—— 日本労働研究機構調査研究報告書 No.146.
- 下村英雄 2002 進路を決める 松井豊編 2002 対人心理学の視点 プレーン出版.
- 菅原 健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 都筑学 1994 自我同一性地位による時間的展望の差異——梯子評定法を用いた人生イメージについての検討—— 青年心理学研究, 6, 12-18.
- 若者の就業行動研究会 2000 フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より—— 日本労働研究機構調査研究報告書, No.136.
- 道下裕史 2002 若者に「働く」ことをどのように伝えるか リクルートワークス研究所 Special Thema, 新世代の就業観インタビュー <http://www.works-i.com/special/freeter.html>.
- Van Calster, K. V., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future : Impact on motivation in the high school boys. American Journal of Psychology, 100, 1-13.